

びわこの 考湖学

時は慶長4(1600)年、関ヶ原合戦の前哨戦ともいえる大津籠城戦により、大津の町は焼け野原と化してしまいました。その後徐々に復興され、元禄年間には約1万9000人の大都市へと成長を遂げます。その繁栄ぶりは、「大津百町」と呼ばれるほどに目覚ましいものでした。

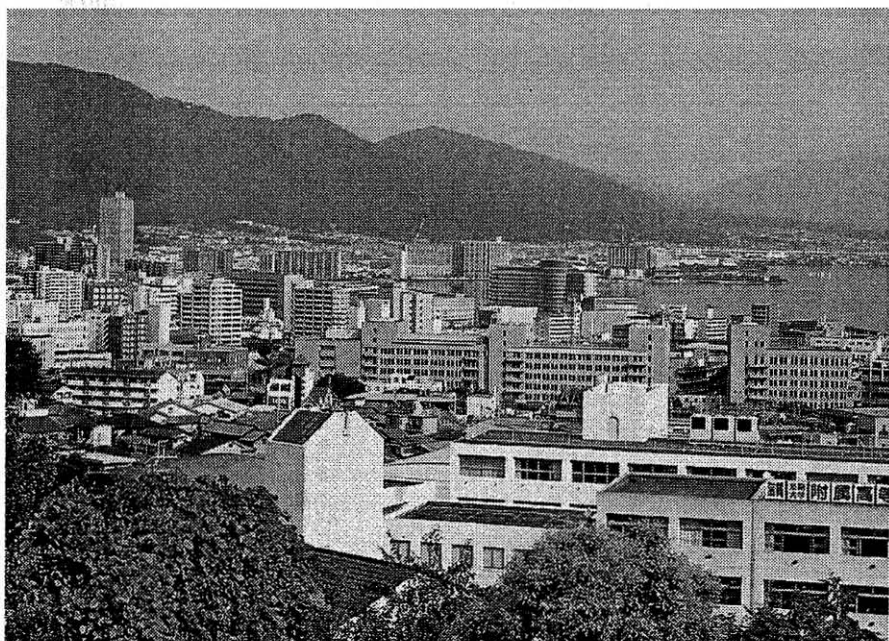
当時の大津の豊かさは、祭りから知ることが出来ます。寛永12(1645)年に狸山(鍛冶屋町)、同14年には三輪山(堅田町)や狸々山(南保町)、明暦2(1656)年に西王母山(丸屋町)、万治元(1658)年に宇治橋(塩谷町)などなど、今に続く大津祭の曳山が続々と造られていきます。

大津百町の様子は、寛保2(1742)年に作成された『大津町古絵図』からも読み取れ、その繁栄を垣間見ることが出来ます。この絵図には、町名などの記述に法則性があり、西と南を上にするという見やすいように描かれています。それでは絵図の記述から大津の町の復興と繁栄の背景についてみていきます。

まず西が上になる記述の理由としては、東海道と湖上水運の存在が挙げられます。関ヶ原合戦に勝利した徳川家康は、直ちに東海道と中山道を江戸と京を結ぶ主要街道とし、各地に宿場を設置するなど、交通の整備に着手しました。籠城戦によって荒廃した大津の町も、大津宿として東海道五十三次の宿場のひとつとなります。籠城戦後に廃城となった大津城跡には代官所と幕府蔵が建てられ、本格的な復興の兆しが見え始めます。やがて東海道宿場の中でも最多の人口を誇るようになるのです。

祭り で知る復興と繁栄

大津百町



現在の津市街地。かつては「大津百町」といわれ、港町や宿場町として活気にあふれていた

法は、大津の港で陸揚げした物資を、東海道を経て京都へ運ぶ物流の方向を示しているといえます。

次に南が上になる記述の理由としては、名所の一つである長等山三井寺(園城寺)の存在が挙げられます。大津は古い町ゆえに周辺に名所が多いのですが、三井寺の門前町であったことも栄えた理由の一つです。三井寺が大津の町に及ぼす影響力は強く、そのことが絵図の記述に表れているのです。

夏の花火に巨大な噴水、古寺や名所を訪れる観光客、湖上を行き交う遊覧船、国道1号や名神高速を埋める多数の自動車……。現代社会の中で大津の旧中心街には「大津百町」の賑やかさは薄れましたが、いよいよ5日に山建て、11日に宵宮、12日に本祭を迎える大津祭で、当時の繁栄をしのぶことができます。

(滋賀県文化財保護協会 重田勉)

るなど、国内の輸送において重要な役割を担ってきまし、これまで以上に多量の物資が大津に陸揚げされるようになった。そして、豊臣秀吉が組織させた「大津百艘船」により、資が大津に陸揚げされるようになった。このような歴史的事実から、大津の水運はさらに発展し、西を上にした記述方

みると、西を上にした記述方